

私の……夢……。

私の……楽園……。

私の……。

気が付けば、何もなくなっていた。

大きな夢も、つないだ手の先も、心を癒してくれた微笑みも、

何も。

全て、無くした。

私は……。

私の夢……楽園……。

カエセツ！

沸き上がる感情で舌を噛み切る。

立ち上る青い激情が今一度世界を焦がす。

中央都市『イカロス』中間地点。

外区から続く壁に囲まれたハイウェイ。その真ん中で一台の装甲車が二つに裂かれ黒煙を吐き出しながら炎上している。

「私の……夢……」

黒煙を切り裂き現れた者。

紫の装甲に四つの眼、青い炎を身に纏った紫の魔人『アイ』。アイは呟きながら宙を仰ぐ。

「何処？ サウザント……何処？ 私達の、楽園」

フラつく足取りでアイは外区の方へ歩き出す。それを遮るように一人の男がアイの前に立ち塞がった。

黒い短髪に縦に走る大きな傷、額から滴る鮮血、所々破れた軍服に長い焦げたマフラーを纏った体格のいい男。男は無数の傷を負い、鮮血を滴り落としながらアイの前に立ち塞がる。

「大人しくしていただきたい。従わなければ力づくになる」

PHOBIA

外節

夢見る魔人

しもつきねくら
霜月音閣



血溜まりを作りながら男は息も絶え絶えに話す。そんな男に目もくれず、アイは歩み出す。息を落ち着かせ、男が拳を握った、次の瞬間、巨大な影が舞い降りた。

はためく白いレース付きのスカート、舞い踊る黒いツインテール、三つの瓶をぶら下げた黒いチョーカー、左眼を覆う白い包帯、そして射殺す黒い隻眼。自分より一周り大きい騎士団の男と紫の装甲をまとったアイの真ん中に、遮るように舞い降りたゴシック服装の少女。少女は薄く微笑むとスカートを摘み上げて、行儀良く紫の魔人に礼をした。

「初めまして、紫の魔人。この良き日、貴方を……ぶつ殺させていただきます」

少女は笑顔でそういうと片手で電子地図を操作し、自分の身長以上もある大鎌を右手に転送した。それを軽々と振りかざし、少女は紫の魔人に向かって突進する。

ハイウェイを擦り火花を散らす大鎌。歯を食いしばり少女が嗤った一瞬、牙が弧を描いて振り上げられる。

刃先が紫の魔人を捉え、鋭く打ち込まれる、が、装甲を貫けない。

「くっ、たあああ！」

少女は伝わる感触でそれを知りながら、力任せに大鎌を振り抜いた。魔人は軽く宙を舞い、一回転して着地する。

「いったあ、こんなに硬いんだ、魔人って」

少女は手に息を吹きかけそう言うと、柄を握り直し、刃を後

ろに回す。

「斬れないなら、殴り殺すのみ」

言うが早いか、得物を振り上げ、少女は紫の魔人に向かって突っ込む。振り下ろす峰の一撃は魔人を打ち伏せ、僅かに装甲に亀裂が走る。

「もう一発！」

振り下ろした大鎌の勢いで一回転し、流れるようにもう一撃を魔人に叩き込む。その衝撃で亀裂が広がり、青い炎が舞い上がった。

「もう一つ！」

「ガアアア！」

もう一撃打ち込もうとした瞬間、紫の魔人が吠えた。大気を裂くような咆哮が一瞬で空気を殺す。その殺気を感じ、少女は咄嗟に距離をとった。

「ダレ……誰？」

紫の魔人は顔を上げると首を傾げ、そう呟いた。映らない目に狂気を漂わせ、魔人はふらつく。

「楽園……サウザント……何処？ 何処！」

辺りを見回し、紫の魔人が吠える。そして、殺意のこもった眼で少女を睨みつけた。

「ダレ……誰？」

光が増えた次の瞬間、魔人の爪が少女の脇腹を抉った。地から這い出すように見上げる四つの眼、その全てが少女を見つめ

る。

「キレイ……その眼、真つ直ぐで、未来を……欲しい、その眼、頂戴！」

「ダメ」

少女は即答して舌を出す。這い上がる魔人の顔を踏みつけ、それを踏み台に宙に舞い上がる。真つ直ぐな姿勢で綺麗に着地し、若干二・三歩ふらつきながら踊るように距離をとる。

「斬れないとフラストレーション溜まるね。殴るのもボクのやり方じゃないし、切り替えさせてもらおうかな」

そう言つてチョーカーに手をかけた瞬間、濃厚な殺気が走り、眼前に現れた魔人の薙ぎ払う右の一撃が大気を裂く。眼を狙つたその一撃を、少女は咄嗟にしゃがんで躲し、降り下ろされる左の二撃目をバックステップでよけ、距離をとつた。

「その眼……眼……」

「そんなに沢山あるのにまだ欲しがらなくて、いったい何が見たいの？」

「私の夢……楽園……」

「そう……その眼は、何も見えていないのね」

チョーカーに手をかけ、赤い小瓶を頰動脈部の開口部にセットし、上にあるボタンを押す。

「今のままじゃ一寸きつい。タガ、外させてもらおうよ。……RE D、投薬」

小瓶に入った赤い液体がみるみるうちに消えていく。眼を閉

じ、天を仰ぐ少女、片手で電子地図を操作し、物質転送を始める。物質変換の輝きが少女を包む。光が失せ、現れたのは赤い洋服を身にまとつた少女だった。細かな装飾のされた手の込んだ真紅の上着、幾重にも重ねられた短なスカートには無数のフリルが折り重なっている。髪をまとめる二つの赤い髑髏、少女は口角を歪ませ、不敵に笑うと閉じていた目を開いた。鈍く光る赤黒い右眼、左目を隠す眼帯では同じ色の眼をした髑髏が啜う。

「じゃあ、いらねえな！」

そういうと腰に携えた二つの鎌を抜き取り、放たれた矢のように紫の魔人との距離を詰めた。一瞬、後ずさる紫の魔人、その瞬間、慈悲無き二つの爪撃が平行の軌跡を描き、魔人の四つ目を切り裂いた。

「がっ！」

咄嗟に顔を押さえ、よろける魔人に、少女は笑いながら二本の鎌を振りかざす。

ギーン！

火花が飛び散り、装甲片が僅かに宙を舞う。

「ちっ、通常じゃ斬れねえか。めんどくせえ」

吐き捨てると少女は両手に持った鎌を放り投げ、片手で電子地図を操作する。

「転送っと」

電子地図をスカートのポケットに放り込むと両手を広げる。

光の粒子が集まり、両手を被ったかと思うと、真紅の箒手が少女の両手を包んだ。

「やっぱ、俺はこれだよな。……いくぜ」

不敵に笑うと少女は顔を押しさえ再生を待つ紫の魔人と距離を詰めた。

「オラッ！」

打ち上げる一撃が紫魔人の腹を捉える。装甲片が散り、魔人は体勢を崩す。殴った手を振り、少女は不敵に笑った。

「かてえなあ。殴りがいがあるつて、もんだっ！」

振り上げる拳が無防備な魔人に突き刺さり、火花と装甲片を舞い散らせる。

「ガッ……ダレ……誰！」

薙ぎ払う魔人の一撃が宙を斬り、間一髪よけた少女の洋服を切り裂いた。

「あ？ 誰？ 俺か、俺の名は『ねくら』だ！ 痛みと共に、覚えておけ！」

振りかざす赤を纏った敵意、それは叩き込まれる寸前のところで、紫の手によって受け止められた。刻まれた紫の顔は再生が遅く、未だに傷は塞がっていない。だが、ひとつ、顔の装甲が筆り取られ、神速発動時にだけ開く眼が圧縮された狂気を孕んで紅く輝いていた。

「ダレ……誰？」

振りかざされる魔人の乱雑な攻撃が矢継ぎ早にねくらを襲う。

ねくらはそれを紙一重で躲しながら、紫の魔人と距離をとった。

「なんだあ……てめえ、見えてねえな」

紫の魔人はふらつきながらゆっくりと体勢を立て直し、天を仰ぐ。そして吼えるように叫んだ。

「サウザントオオオオオオオオオ！」

その姿を見て、ねくらは吐き捨てる。

「そうか、やっぱ何も見えてねえ。てめえは、最初っから、何も見ちゃいなかったんだな。そして今は、自分すら見えちゃいねえ！」

叫びながらねくらは魔人との距離を詰める。無防備に佇む魔人は打ち込まれるねくらの拳をよけようともせず受けた。

「ダレ……誰？」

「それは俺に対しての問いじゃねえ、自分は誰か？ そう言ってるんだろ？ わりいが、知らねえよ！」

繰り出す左の一撃も魔人はよけずに受けた。ふらつきもせず立ち続ける魔人に、ねくらは拳を打ち続ける。

「その眼……欲しい。未来を見る、その眼。私は……」

「手に入れたって見えねえさ。目を、背けているうちはなあ！」
右のストレートが紫の魔人の顔に突き刺さり、傷の間に亀裂が走る。その痛みに反応して、紫の魔人の腕が動いた。

ゴッ！

打ち据える一撃。鮮血が飛び散り、地面に赤い花を咲かせる。

「私は、見ている……夢を……」

青い炎を燦らせながら、紫の魔人が呟く。大量の鮮血を頭から流し、ふらつきながらもねくらは顔を上げた。

「あがつ、つつ、はあはあ。見ちや、いねえさ。お前は何も。語るだけの夢なら、寝て見ろ！」

今一度ねくらの右拳が魔人の顔に突き刺さる。魔人は直撃を受けたにもかかわらず、何事もなかったかのように佇んでいる。

「私は……私は……」

言葉に感情がこもった、その瞬間、振り払う魔人の一撃がねくらを打ち上げた。

「がっ！」

四つの目が輝くその時、無数の打撃がねくらの身体を貫いた。洋服片と鮮血が舞い散り、ねくらは大地に落下する。

「サウザント……何処……貴方がいないと、私は……」

「がっ、はっ、やってくれたなあ。そうじゃねえとなあ」

鮮血を吐き出し、ねくらはゆっくりと立ち上がる。

「さあ、楽しもうぜ。お前もやる気に、なっただろ？」

「人間の分際で、生意気ね」

開いたままの四つの眼、その輝きが目に見えぬ軌道を描く。

一瞬、風が走ったかと思うと紫の魔人はねくらの背後に立っていた。

「……………人間」

「二回も見てるんだ、目も慣れるさ。それに一つ言っておく」

「俺の中の人間は、とおの昔に、死んだ」

そう言ってねくらは不敵に笑う。

刹那、同時に振り返ったその時、ねくらの拳が魔人の顔を捉えた。その衝撃に、魔人は初めてふらついた。

「なあ、魔人。見えてない目で何を見る？ 目を集めてまで何が見たかった？ お前たちは、何を見ている？」

「私たちは……未来、夢、楽園……サウザント……私は」

ずっと二人だった。

隔離された楽園で、ずつとずつと。

まるで、世界に二人しかないような。

そんな世界で生きていた。

そして、これからも、ずつと二人だと思っていた。

私には貴方しかいなくて、貴方にも私しかいない。

それで十分だと思っていた。

でも、貴方は、違ったのね。

サウザント。

ねくらの拳が突き刺さり、魔人は体勢を崩す。

「お前は夢を語っていた。だが、実際はどうだ？ 未来を見ることを恐れ、目を背け、それでいて未来に憧れている。お前が

恐れているもの、それは、夢、そのものじゃないのか？」

「恐れ……私は、恐れてなど……いない！」

振り上げる尖った拳がねくらの腹に食い込む。鮮血を吐き出し、ねくらは膝をついた。

「がっ、はあはあ、じゃあ、何で、進もうとしない。その先を、その結果を恐れているからだろが！」

振り上げるねくらの一撃を魔人は軽くかわし、無造作に蹴り飛ばした。その蹴りを辛うじて受け、ねくらは大地を転がる。

「結果、恐れ……そう、私は、恐れていたのね。一人になる事を、一人と、思い知らされることを」

ふらつきながら立ち上がるねくらと向かい合い、紫の魔人は青い炎を吐き出す。装甲の隙間から立ち上る青い炎、輝く四つの眼、しかし、さっきまでの狂気はない、あるのは、覚悟か。

それに答えるようにねくらはひとつの小瓶を手にする。そして、それをチャーカーの頸動脈部分にセットし、ボタンを押した。

「クリムゾン……投薬」

一瞬の間が空いた刹那、二つの影が動いた。

一撃。

ねくらの足に転送された巨大な刃が紫の魔人を切り裂いた。

噴出す青い炎、紫の装甲が剥がれ落ち、中からアイが現れ、そのまま大地に伏した。

そう、どんなに壊しても、どんなに直しても。

月が見えても、虹が見えても。

花が咲いても、風が吹いても。

結局は……

たった一人の

楽園。

「楽園なんて要らなかった。ただ、二人で笑っていられたら、それだけで」

チャーカーにはまった小瓶を無理やり外し、ねくらは荒い息をつく。そして、アイを見下ろし小さく呟いた。

「夢は、寝てみる。叶わぬと、眼をそらすのなら。向き合えるようになったら、また立ち上がれ。夢はお前を、見捨てたりはしない」

今一度チャーカーに手をあて、ボタンを押す。赤い空気が排気され、ねくらは大きくため息をついた。

「ふう、さてと、じゃ、後はよろしくね。騎士団さん」

それだけ言って、ねくらはその場から、外区に向かつて走り去る。それを見送り、騎士団の男は立ち上がった。

「ギルド……侮れんな」

燃える車両、地に伏すアイ、佇む騎士団の男。すべては歯車のひとつ。

大きな歯車とともに動く小さな物語。

《了》